日田市埋蔵文化財調査報告書第 122 集

銭渕遺跡

銭渕遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第122集

２０１６年

２０１６年

日田市教育委員会

日田市教育委員会

序　　文

この報告書は、当委員会が平成２５・２６年度に宅地造成工事に伴って発掘調査を行った銭渕遺跡の調査の内容をまとめたものです。

調査では、古墳時代の終わりから奈良時代の初め頃の役所関連と推測される大型の建物などが発見され、本遺跡の重要性を物語る成果を挙げることができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や普及啓発、地元高瀬地区の歴史を知る手掛かりとして、また学術研究等にご活用いただければ幸いです。

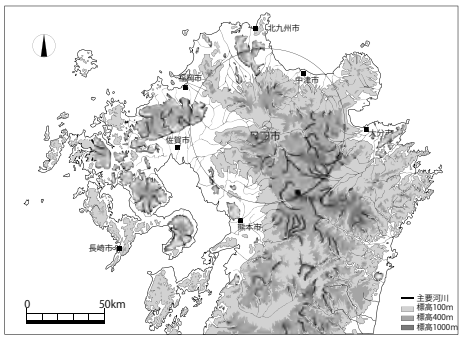
最後に、調査に対するご理解やさまざまなご協力を賜りました関係者のみなさま、作業にご尽力いただきました作業員のみなさまに、心より厚くお礼を申し上げます。

平成２８年３月

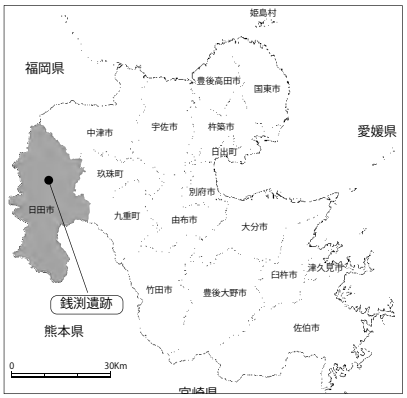
日田市教育委員会
教育長　三 笘　眞 治 郎

例　　言

1. 本書は、宅地造成事業に先立ち、平成 25・26 年度に市教育委員会が実施した銭渕遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は宅地造成工事に伴い、有限会社宝珠開発の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査現場での遺構実測は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に一部を委託したほか、森山敬一郎・財津真弓・調査担当者が行った。
4. 調査現場での写真撮影は、調査担当者が行った。
5. 調査中は、現地にて田中裕介先生（別府大学教授）のご指導・ご助言を賜った。
6. 本書に掲載した遺物実測は、雅企画有限会社に委託した成果品を使用した。遺物及び遺構製図は高田美保（文化財保護課整理作業員）の協力を得た。
7. 本書に掲載した遺物写真は、調査担当者が撮影したほか、一部を雅企画有限会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。
8. 空中写真撮影は九州航空株式会社に委託し、その成果品を使用した。
9. 挿図中の方位は、第３図は真北を示し、そのほかは磁北で表示している。
10. 写真図版の遺物に付した数字番号は、挿図番号に対応する。
11. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
12. 本書の執筆・編集は、若杉が担当した。



日田市の位置



大分県の行政地区

本文目次

Ⅰ　調査の経過　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ　遺跡の位置と環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・2
Ⅲ　調査の内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
（１）調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
（２）遺構と遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
１．竪穴建物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
２．掘立柱建物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
３．竪穴遺構　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
４．土坑　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
５．出土遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
Ⅳ　総括　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

挿図目次

第１図　調査地位置図（1/5,000）・・・・・・1
第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）・・・・・2
第３図　周辺地形図（1/800）　・・・・・・・3
第４図　基本土層図（1/40）　・・・・・・・3
第５図　遺構配置図（1/200）　・・・・・・・3
第６図　竪穴建物実測図（1/80・1/40）　・・5
第７図　１号掘立柱建物実測図（1/80・1/40）・6
第８図　２号掘立柱建物実測図（1/80・1/40）・7
第９図　竪穴遺構実測図（1/80）　・・・・・・7
第10図　土坑実測図（1/60）　・・・・・・・・・9
第11図　出土遺物実測図
（1/2・1/3・1/4・1/6）・・・・・・・・・11

図版目次

写真図版１　調査区周辺空中写真（北西から）
写真図版２　上　調査区垂直写真（上が北北西）
下　調査区全景（西から）
写真図版３　１・２号竪穴建物
写真図版４　３号竪穴建物・１号竪穴遺構
１・２号掘立柱建物
写真図版５　１号掘立柱建物
写真図版６　１号掘立柱建物
写真図版７　１号掘立柱建物・２号掘立柱建物
２～５号竪穴遺構、７号土坑
写真図版８　１～７号土坑
写真図版９　出土遺物

写真目次

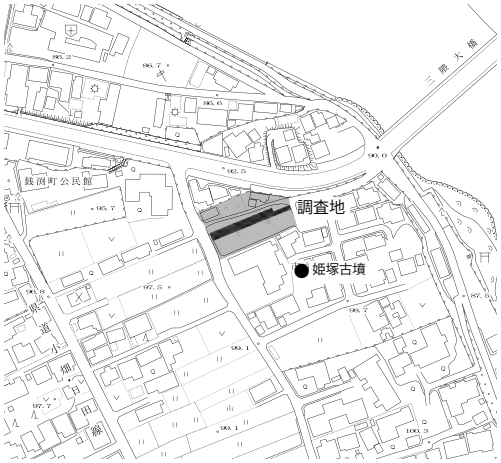
写真１　作業風景・・・・・・・・・・・・・・目次下
写真２　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・3
写真３　２号竪穴建物北壁土層・・・・・・・・・・5

表目次

第１表　出土土器観察表　・・・・・・・・・・・13

写真１　作業風景

Ⅰ　調査の経過



第１図　調査地位置図（1/5,000）

平成 25 年 11 月 13 日付けで有限会社宝珠開発より市教育委員会あてに、日田市大字高瀬字塚脇 237-1 ほか 5 筆について宅地成工事に先立つ埋蔵文化財の所在に関する照会文書（事前審査番号 2013068）が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地（銭渕遺跡）に該当し、南東側約 50 mには古墳時代中期の円墳である姫塚古墳（市指定史跡）もあることから、当該地にも遺跡が存在する可能性が高いとが想定されたため、予備調査が必要である旨の文書回答を行った。その後、11 月 25 日には予備調査依頼の提出を受け、道路位置指定道路予定部分を対象に 12 月 17 ～ 24 日に重機と作業員による予備調査を実施した。その結果、現地表面下約 35 ～ 45 ㎝より、暗黄褐色ローム土の遺構面とこれを掘り込んだ竪穴建物や土坑等を検出した。この予定地の造成は全面盛土工法であるが、造成地内に上下水道配管を伴う位置指定道路については遺跡の保存が困難となる可能性があるため、発掘調査の実施に向けて開発主と協議を重ねた。その後、平成 26 年 2 月 17 日付で発掘調査実施の依頼文を受け、同 19 日に平成 25 年度から 27 年度の 3 カ年に渡る発掘調査から報告書印刷までの協定書、平成 25 年度の発掘調査に係る委託契約を取り交わした。

平成 25 年度の調査は 2 月 25 日から 3 月 25 日の間実施し、翌平成 26 年度には、4 月 4 日に再度委託契約を取り交わし、4 月 8 日から同 30 日の間、発掘調査を実施した。その後平成 26 年 9 月 16 日から 10 月 31 日の間整理作業を実施し、報告書作成（遺物実測等）を行った。平成 27 年度は 6 月 1 日付で、報告書作成（原稿執筆）、印刷について委託契約を取り交わした。なお、発掘調査の経過は次のとおりである。

平成 25 年度

2 月 26 日	重機による表土除去開始
3 月　4 日	作業員による遺構検出開始
3 月 10 日	遺構掘り下げ開始
3 月 25 日	遺構実測開始、平成 25 年度の作業終了

平成 26 年度

4 月　8 日	平成 26 年の作業開始
4 月　9 日	別府大学・田中教授により現地指導
4 月 24 日	空中写真撮影実施
4 月 30 日	遺構掘り下げ、遺構実測終了。 器材撤収し、現地での作業完了

また、平成 25 ～ 27 年度の調査組織は次のとおりである。

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　合原多賀雄（日田市教育長／～平成 26 年 6 月）　三笘眞治郎（同教育長／平成 26 年 7 月～）

調 査 統 括　財津俊一（日田市教育庁文化財保護課長 / ～平成 27 年 3 月）柴尾健二（同課長 / 平成 27 年 4 月～）

調 査 事 務　園田恭一郎（同課埋蔵文化財係長・平成 27 年度は同課主幹（総括）/ ～平成 27 年 9 月）
古賀信一（同課主幹（総括）/ 平成 27 年 10 月～）
武内貴彦（同課専門員 /25 年度）　華藤善紹（同課副主幹／ 25 年度）
諫山温子（同課主事 / 平成 26・27 年度）

調 査 担 当　若杉竜太（同課主査）

調　査　員　行時桂子・渡邉隆行（同課主査）上原翔平（同課主任）

発掘作業員　大関洋　加藤和美　加藤寿子　河津定雄　木下秀子　小暮裕次　五反田静子　財津真弓
津村小夜子　原田美代子　深町正博　森山敬一郎

整理作業員　伊藤一美　黒木千鶴子　武石和美　安元百合

Ⅱ　遺跡の位置と環境（第２図）

銭渕遺跡は、日田盆地南部、三隈川と高瀬川が合流する付近の両川の左岸一帯の河岸段丘上に広がる遺跡である。この河岸段丘の南側には津江山系より派生する尾根筋が幾重にものび、その先端には沖積地と比高差約 30 mの台地や丘陵が広がっている。その間を高瀬川が盆地へ向かって流れ、西流する三隈川と合流する。この合流点付近は、三隈川と高瀬川の浸食作用により河岸段丘が形成され、やや平坦な沖積地に水田が広がっている。また、台地から伸びる尾根筋に挟まれた谷部には湧水点が多くあり、耕作などに利用されている。

次にこれまでの調査成果を中心に本遺跡と高瀬地区の遺跡の動向を時代毎にみていく。

旧石器時代の明らかな遺構は見つかっていないが、手崎遺跡 (8) では台形様石器などが採集されている。縄文時代になると手崎遺跡で住居跡が見られるようになる。口が原遺跡 (7)・上野第 1 遺跡 (10) などでも土器や石器が見つかっている。

弥生時代の遺跡としては、環濠を伴う集落が確認された惣田遺跡 (6) がある。後期になると惣田遺跡の背後にあたる丘陵にある口が原遺跡で小集落が営まれ、手崎遺跡も竪穴建物が確認されている。古墳時代の集落の遺跡としては手崎遺跡・口が原遺跡・陣ヶ原遺跡 (9) 等が挙げられるが、集落規模はそれほど大きくない。また、墳墓は中期の石棺系竪穴式石室を 2 つもつとされる姫塚古墳 (2)、後期の横穴式石室をもつ惣田塚古墳 (5) がある。また、上野から石井へ抜ける旧道沿いに前方後円墳 1 基を含む、護願寺古墳群 (12) がある。

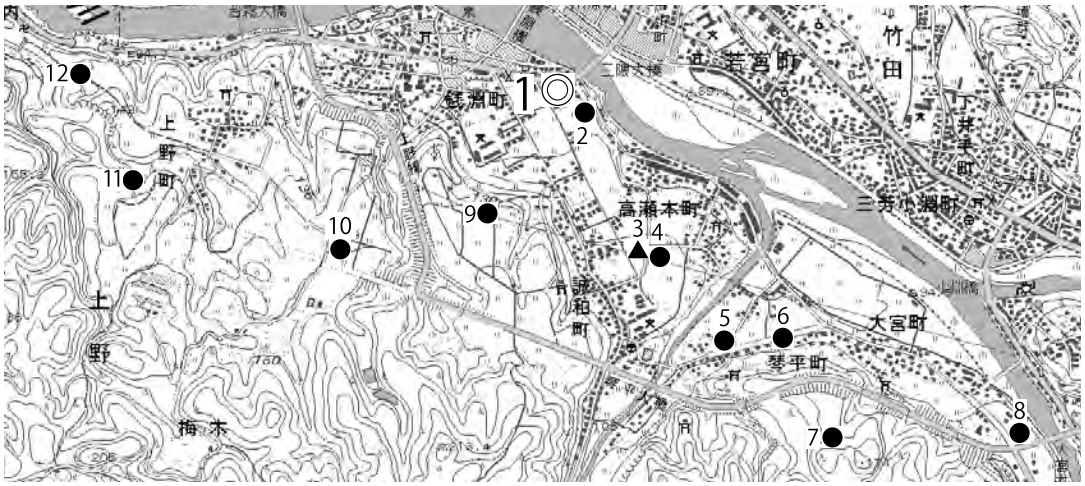
古代の遺跡としては奈良時代に属するものが多く、7 世紀の水路遺構がみつかった惣田遺跡をはじめ、手崎遺跡・口が原遺跡・陣ヶ原遺跡などで集落が確認されている。そしてこの時代で特筆されるのは上野第 1 遺跡の掘立柱建物群である。律令期、三隈川南岸一帯は日田郡五郷のうち、「石井郷」に比定されており、郷内には「石井駅」が設置されたとある（『延喜式』）。このことから、当時の官道は石井郷を通っていた可能性があり、そのことの証左となる遺物が、上野第 1 遺跡で出土した「豊馬豊馬」と刻書のある権である。この遺跡の建物群が駅そのものであるかどうかは判断できないが、官道が付近を通っていたことを示すと考えられている。平安時代の遺跡はほとんど確認されておらず、手崎遺跡で 9 世紀の土坑と土器が見つかった程度である。

中世には三隈川南岸のなかでも高瀬地区に 5 つの寺院があったとされ、そのうちの 1 つ、永平寺（いひじ）跡には現在 1311（応長元）年・1313（正和 2）年銘の板碑（ともに市指定有形文化財）(3) が残されており、付近で行われた高瀬条里永平寺地区 (4) の調査では当時のものと考えられる掘立柱建物が確認されている。

《参考文献》田中裕介『日田市高瀬遺跡群の調査３　上野第 1 遺跡』一般国道 210 号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　大分県教育委員会　2001

高橋徹ほか『日田市高瀬遺跡群の調査４　寺内遺跡 / 上野第 2 遺跡』同上Ⅳ　大分県教育委員会　2002

『日田市史』日田市　1990、その他日田市教育委員会発行の関係遺跡の発掘調査報告書など



1　銭渕遺跡
2　姫塚古墳
3　永平寺板碑
4　高瀬条里永平寺地区
5　惣田塚古墳
6　惣田遺跡
7　口が原遺跡
8　手崎遺跡
9　陣ヶ原遺跡
10　上野第１遺跡
11　上野第２遺跡
12　護願寺古墳群

第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

Ⅲ　調査の内容

（１）調査の概要（第４・５図　写真２）

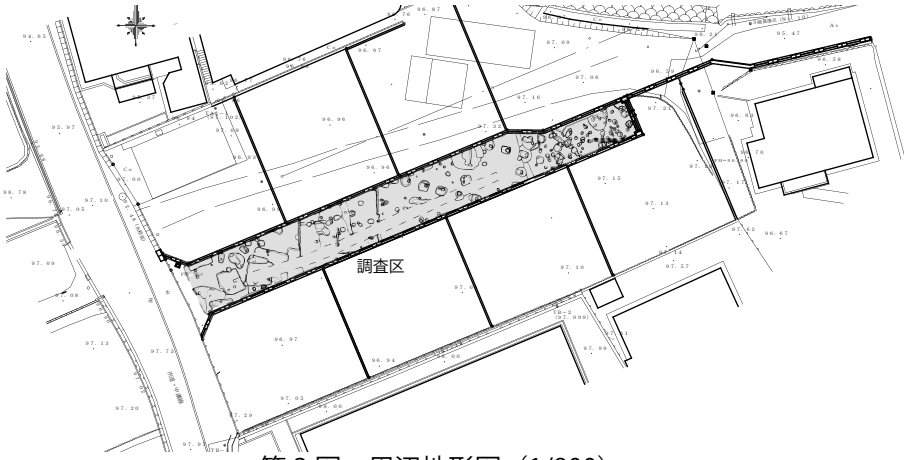
調査は位置指定道路範囲を対象にまず、遺構検出面までを重機により掘り下げ、人力で遺構検出を行った。検出面は現地表より約 40 ㎝の深さを測り、東側は暗黄褐色粘質土、西側は礫を多く含む暗褐色土であった。なお、検出面の標高は調査区中央付近から西側が 96.5 m前後、東側が 96.3 m前後であった。

検出面（3 層上面）より下層は暗茶色の粘質土層を挟んで、後期旧石器時代に相当する黒色帯、その下層には黄色ローム層が堆積していた。

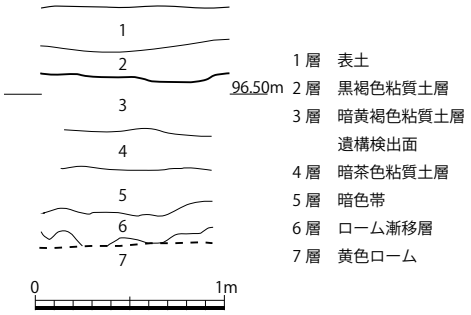
この面での遺構検出の結果、竪穴建物３軒、掘立柱建物２棟、竪穴遺構５基、土坑７基と多数のピットが確認された。これらの遺構は、調査区の中央から西側に多くが集中していた。東側でもピットが多数検出されたが、建物の柱穴と判断できるようなピットは確認できなった。

確認された遺構の内、１号掘立柱建物を除く遺構については、半掘及びベルトを残して掘り下げ、床面を把握してから完掘を行った。１号掘立柱建物については、半掘により柱痕跡や埋土の確認、底面の礎板石の位置を確認しながら、土層観察を行い、その後、全掘を行った。

なお、予備調査時に遺構検出面と判断できずに黄色ローム層（7 層）まで掘り過ぎてしまったため、トレンチにかかる遺構の一部を破壊している。

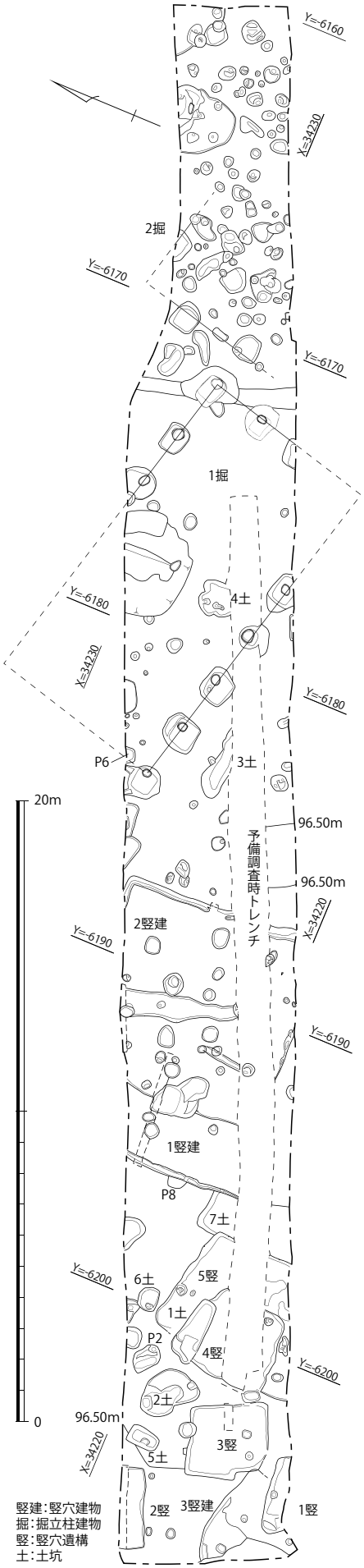


第３図　周辺地形図（1/800）



第４図　基本土層図（1/40）

写真２　基本土層



第５図　遺構配置図（1/200）

（２）遺構と遺物

１．竪穴建物

竪穴建物は調査区中央から西側で３軒が確認された。

１号竪穴建物（第６図　図版３）

この建物は、調査区の中央よりやや西側で確認され、７号土坑を切り、東側を２号竪穴建物に切られる。北側及び南側は、調査区外へ広がり、西壁の一部と東側に壁際溝が確認されている。規模は、東西軸約 4.2 m西壁部分で長さ約 3.8 m、検出面からの深さは約５～ 10 ㎝を測る。床面には、４個のピットが確認されたが、深さや位置関係からＰ１が主柱穴の可能性があるが、その他については、主柱穴と判断できるものはなかった。

遺物は須恵器蓋・高坏・甕、土師器坏・高坏などが出土している。

２号竪穴建物（第６図　図版３）

この建物は、１号竪穴建物の東隣で確認され、１号竪穴建物を切る。南東隅と北壁から北西隅にかけては、調査区外へ広がるものの、平面形はほぼ正方形を呈するとみられる。規模は東西軸約 6.4 m、東壁側で約 5.6 m＋αを測り、南壁と北壁の想定ラインから、南北軸は約 6.8 mと推定される。検出面からの深さは約 20 ㎝である。床面には多数のピットが確認されたが、明確に主柱穴と判断できるものはなかった。また、ほぼ全体に壁際溝が確認されている。

なお、カマドは検出されなかったが、北側の調査区北壁付近で焼土や粘土塊を検出、さらに北壁の土層を観察した結果、この部分でも同様に焼土・粘土塊が確認された。粘土塊は、カマド袖の痕跡とも考えられ、調査区外にある北壁側にはカマドの存在が想定される。

遺物は床面付近より、須恵器蓋・甕、土師器甕・坏・皿・高坏などが出土している。

３号竪穴建物（第６図　図版 4）

この建物は、調査区の南西隅で確認され、１号竪穴遺構に切られる。建物は北側の壁のみが確認され、その一部に壁際溝が確認されたことから、建物と判断した。また、北壁以外は調査区外へ広がるものの、平面形は他の建物と同様に方形を呈すると見られる。また、東半分は床面を掘り過ぎている。規模は北壁で約 3.5 m、検出面からの深さは、床面が残っている東側で約 15 ㎝を測る。また、床面にはピットが数個検出されたが、主柱穴と判断できるものはなかった。

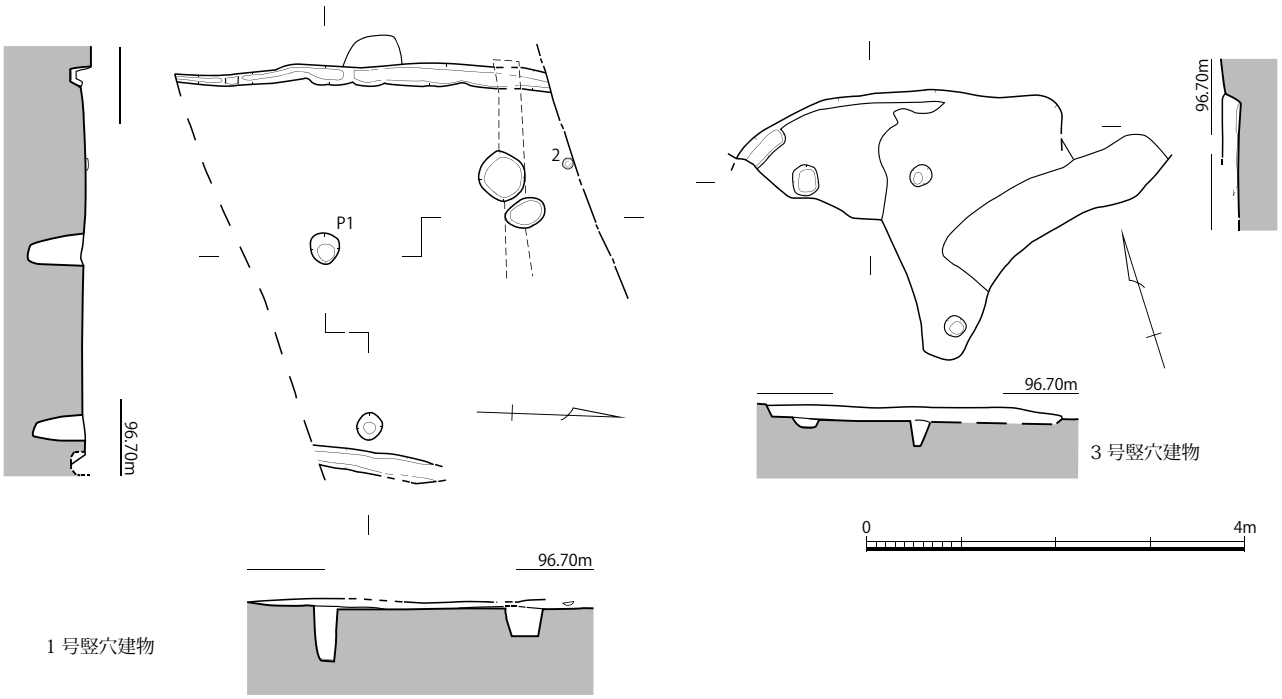
遺物は土師器坏などが出土している。

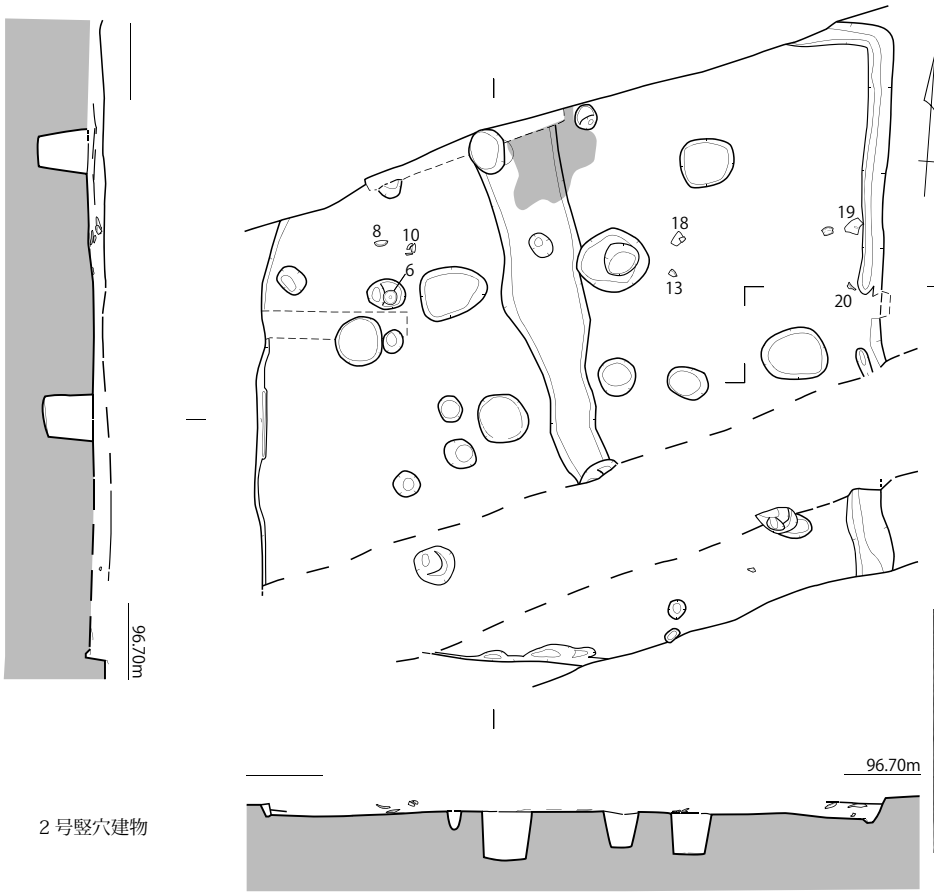
２．掘立柱建物

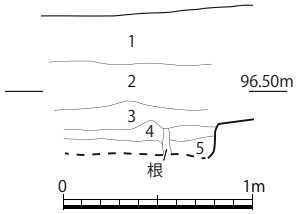
掘立柱建物は、調査区中央よりやや東寄りで主軸方向を揃えた２棟が確認された。なお、前述したように１号掘立柱建物については、当初から建物と把握して掘り下げを行ったため、詳細な観察や記録を行うことができた。しかし、２号掘立柱建物については、Ｐ２が１号と同類の柱であることが把握していたが、Ｐ１とＰ３については、調査終了後の整理段階で建物の柱穴の可能性を判断したため、土層写真や全体写真等十分な記録ができていないことを記しておく。

１号掘立柱建物（第７図　図版４～７）

この建物は、調査区のほぼ中央で確認された。主軸をＮ‐76°‐Wにとる。調査区内では 10 個の柱穴が確認され、調査区外へ展開するため、全容は窺えないが、柱の並びから南側の隅は推定できることから梁行３間とみ







1 層　表土
2 層　黄褐色粘質土層　建物埋土、焼土少し含む
3 層　黄茶褐色粘質土層　焼土ブロック多く含む
カマド破壊の残骸か
4 層　暗褐色粘質土層
5 層　暗黄褐色粘質土層　床面（地山）

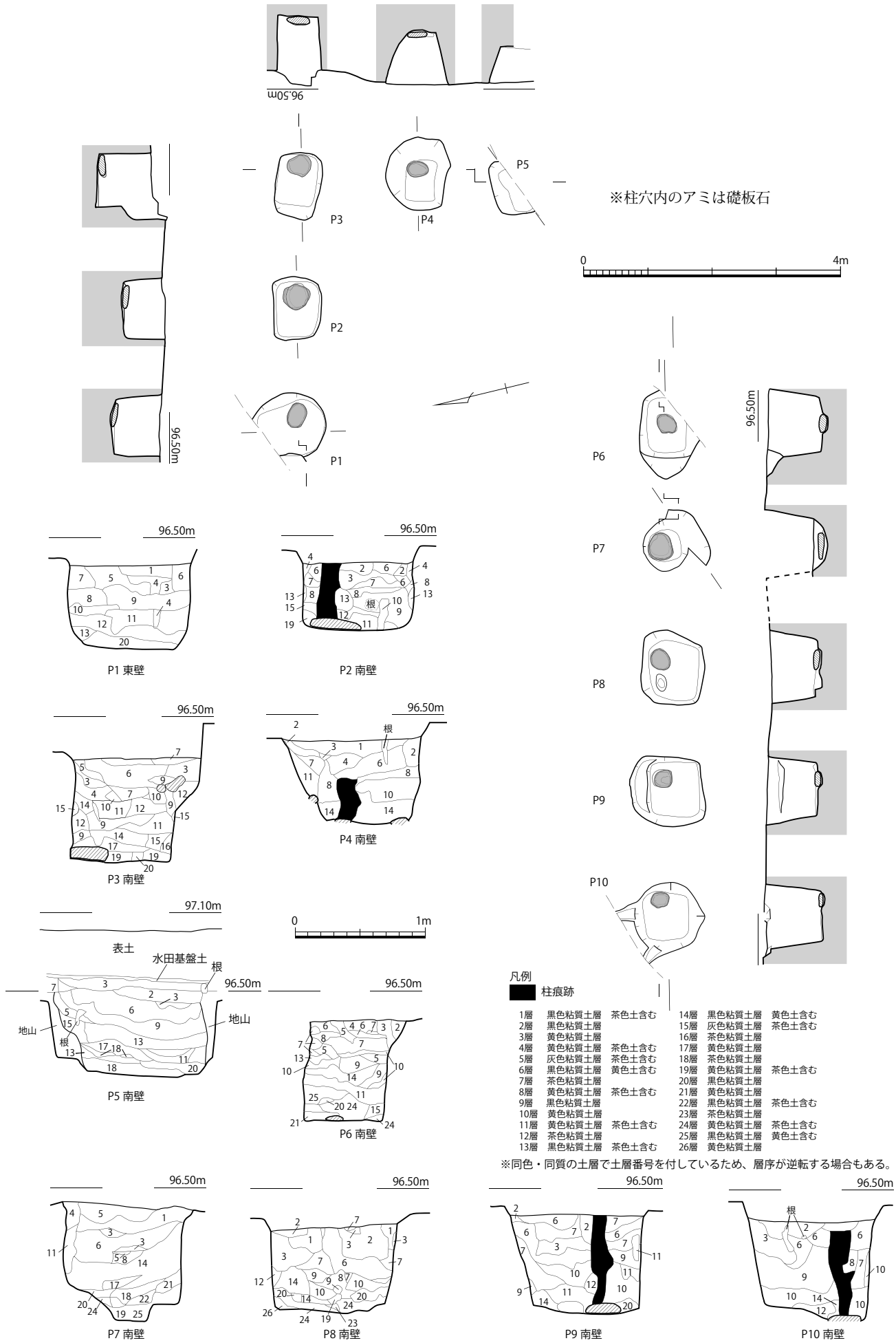
北壁土層実測図（1/40）

※アミ部分は焼土

写真 3　2 号竪穴建物北壁土層

※平面図中の番号は第 11 図の実測図番号に対応

第 6 図　竪穴建物実測図（1/80）

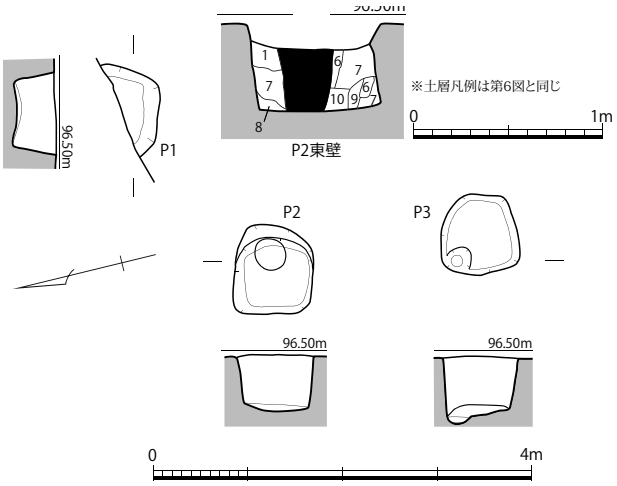


第 7 図　1 号掘立柱建物実測図（1/80、土層 1/40）

られる。桁行については、６間もしくはそれ以上と考えられる。規模は心々距離で、梁行約 5.6 m、桁行約 11.4 m＋ α と推定される。

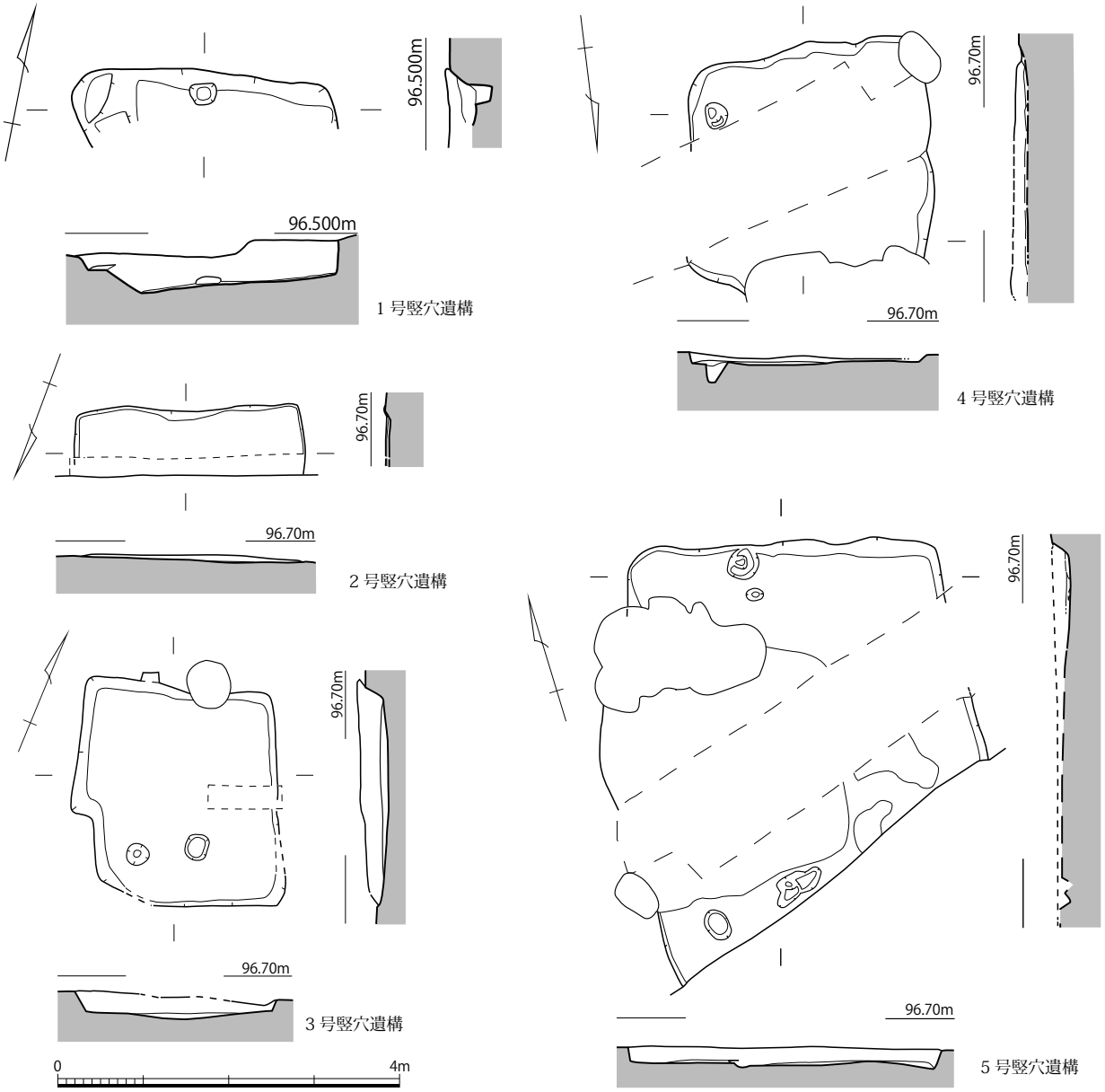
柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約 80 ～ 90 ㎝、検出面からの深さは、浅い柱穴で約 60 ㎝であるが、概ね 80 ～ 90 ㎝を測る。なお、柱穴の本来の深さについては、隣接する竪穴建物の深さが 10 ～ 20 ㎝程しかないことから、上面は削平を受けていると考えられ、本来の深さは現状よりも 50 ～ 60 ㎝深かったことが想定される。

柱痕跡については、平面では判別がしにくく、確認できたものはＰ９のみであった。次に柱穴の痕跡が土層観察により確認できたのが、Ｐ２・４・９・１０のみであった。このほかの柱穴については、柱の抜き取りが行われたと想定でき



第８図　２号掘立柱建物実測図

（1/80、土層 1/40）



第９図　竪穴遺構実測図（1/80）

る。また、痕跡が確認できた４本の内、Ｐ４・９・10については、中途で折れたとみられる。特にＰ４については、西側から中央に向かって斜めに埋土が堆積してることから、西向きに柱穴を倒して抜こうとしたことが想定される。さらに、土層の堆積状況から、柱を据える際に黒色系、黄色系、灰色系、茶色系の土質の異なる土を版築状に埋め戻していることが確認できた。なお、Ｐ７について前述したように予備調査時の掘り過ぎにより、平面及び土層観察での柱痕跡を確認することはできなかった。

このほか、Ｐ５を除く、柱穴の底面には礎板石が据えられていた。Ｐ５については、調査区外へ広がるため、全掘ができなかったが、他の柱穴同様に礎板石を据えていると考えられる。これらの礎板石の内、Ｐ３とＰ８のものは目の粗い堆積岩系、それ以外は安山岩系の石材であった。また、柱のあたりとみられるものがＰ７の礎板石にあり、Ｐ４・Ｐ６のものには、わずかな凹みが見られたり、やや平滑に仕上げられた痕跡があった。

遺物は須恵器の甕破片や土師器坏のほか、Ｐ１・２・４・５・８・９より土師器片が出土している。

２号掘立柱建物（第８図　図版４・７）

この建物は、１号掘立柱建物の東側で確認された。調査区内において、同規模、同平面形の３本の柱穴が確認されたことから、建物と判断した。南側の展開は不明であるが、北側の調査区外において、北西隅の柱の位置が想定される。主軸は、１号掘立柱建物と同様の方向（Ｎ‐76°‐W）をとることから、２棟の建物が並んで建っていたと推定できる。規模は、心々距離で、梁行約 3.4 m＋ α、桁行約 1.6 m＋ α を測る。

柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約 80 ～ 90 ㎝、検出面からの深さは、40 ～ 55 ㎝を測る。柱痕跡については、Ｐ２で平面。土層断面ともに確認された。なお、１号掘立柱建物で確認された、柱穴底面の礎板石は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

３．竪穴遺構

ここで竪穴遺構とするのは、平面形としては竪穴建物と類似するものの、カマドや主柱穴、壁際溝など、建物としての要素を確認できなかったものとした。

１号竪穴遺構（第９図　図版 4）

この遺構は、調査区の南端で確認され、３号竪穴建物を切る。南側は調査区外へ広がっているが、平面形は方形を呈するとみられる。床面には段落ちやピットが見られ、２段目の床は東から西へ向かって傾斜する。規模は、東西軸約 2.5 m、南北軸約 0.5 m＋α、検出面からの深さは、１段目の床面まで約 20 ㎝、２段目の床面まで約 40 ㎝を測る。

遺物は土師器片が出土したが、図化可能なものはなかった。

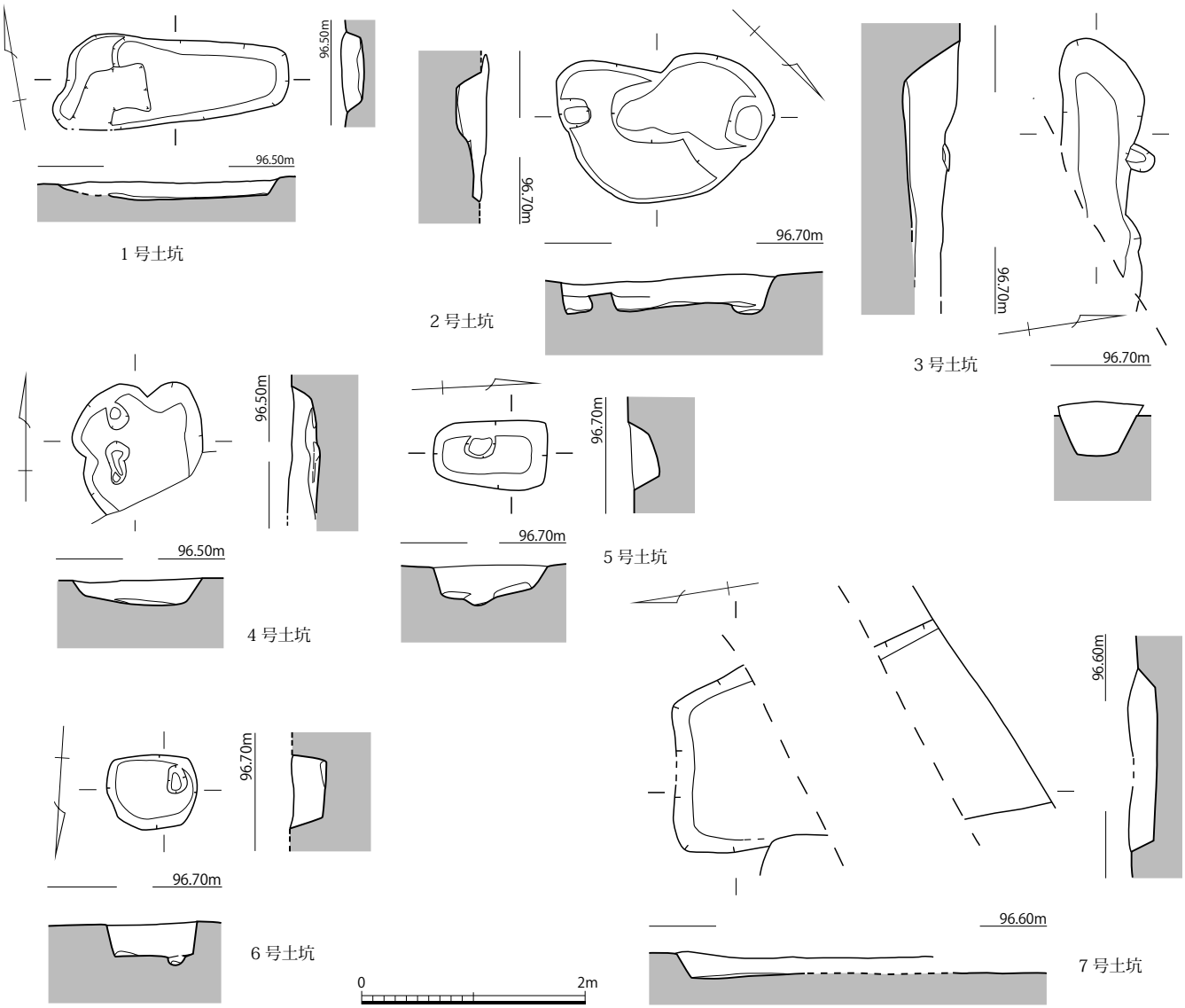
２号竪穴遺構（第９図　図版７）

この遺構は、調査区西端の北壁側で確認された。北側は調査区外へ広がっているが、平面形は方形を呈するとみられる。床面は西側が若干下がっている。規模は長軸約 2.6 m、短軸約 0.7 m＋ α、検出面からの深さが最も深い部分で約 10 ㎝を測る。

遺物は須恵器蓋・甕、土師器甕などが出土している。

３号竪穴遺構（第８図　図版７）

この遺構は、１号竪穴遺構の北側で確認された。平面形は西側に張り出しを持つが、ほぼ方形を呈する。床面



第 10 図　土坑実測図（1/60）

が中央部分に向かって若干傾斜する。また、地山に含まれている 10 ～ 20 ㎝の礫が露出している状態であった。規模は南北軸約 2.6 m、東西軸約 2.4 m、検出面からの深さは中央付近の最も深い部分で約 25 ㎝を測る。

遺物は土師器片が出土したが、図化可能なものはなかった。

４号竪穴遺構（第９図　図版７）

この遺構は、３号竪穴遺構の東側で確認され、５号竪穴遺構を切り、１号土坑に切られる。また、予備調査時のトレンチによって、中央部分を掘り過ぎてしまっているが、平面形は方形を呈することが分かる。床面はほぼ平坦である。埋土は、暗茶色を呈する粘質土であった。規模は東西軸約 2.7 m、南北軸約 2.4 m＋ α、検出面から床面までの深さは約 10 ㎝を測る。

遺物は土師器甕などが出土したが、図化可能なものはなかった。

５号竪穴遺構（第９図　図版７）

この遺構は、４号竪穴遺構の東側で確認され、４号竪穴遺構・１号土坑に切られる。また、予備調査時のトレンチによって、中央部分を掘り過ぎ、南側は調査区外へ広がっているが、平面形は長方形を呈すると考えられる。床面は、ほぼ平坦である。埋土は、黄茶色を呈する粘質土であった。規模は東西軸約 3.6 m、南北軸約 4.4 m＋

α、検出面からの深さは約 10 ～ 20 ㎝を測る

遺物は土師器片が出土したが、図化可能なものはなかった。

４．土坑

１号土坑（第 10 図　図版８）

この土坑は、調査区の西側で確認され、４・５号竪穴遺構を切る。平面形はやや歪な長方形を呈し、床面は２段掘りで、南側の一部が撹乱を受けている。また、断面形は緩やかな舟底状である。埋土は下層に砂混じりの明褐色粘質土、上層には明茶色土が堆積していた。規模は長軸約 2.0 m、短軸約 0.8 m、検出面からの深さは、１段目の床面まで約５㎝、２段目の床面まで約 10 ㎝を測る。

遺物は出土しなかった。

２号土坑（第 10 図　図版８）

この土坑は、１号土坑の西側で確認された。平面形は不定形を呈し、床面は２段掘り、さらにピット状の掘り込みも見られる。また、北西から南東へ向かって、やや傾斜する。埋土は礫混じりの明茶色土であった。規模は長軸約 1.9 m、短軸約 1.2 m、検出面からの深さは１段目までが約 10 ㎝、２段目までが約 15 ㎝を測る。

遺物は出土しなかった。

３号土坑（第 10 図　図版８）

この土坑は、調査区の中央付近、１号掘立柱建物の南側に隣接して確認された。東側を予備調査時のトレンチで掘り過ぎてしまっているが、平面形は細長い楕円形を呈し、床面がほぼ平坦である。埋土は黄色ブロックを含む黒褐色粘質土であった。規模は長軸約 1.7 m＋ α、短軸約 0.7 m測るが、予備調査時のトレンチの東側でプランを確認できてないことから、長軸は最長で約 3.3 mを測ると思われる。また、検出面からの深さは約 45 ㎝である。

なお、１号掘立柱建物と軸方向がほぼ同じことから、関連する遺構の可能性もある。

遺物は土師器甕片が出土したが、図化可能なものはなかった。

４号土坑（第 10 図　図版８）

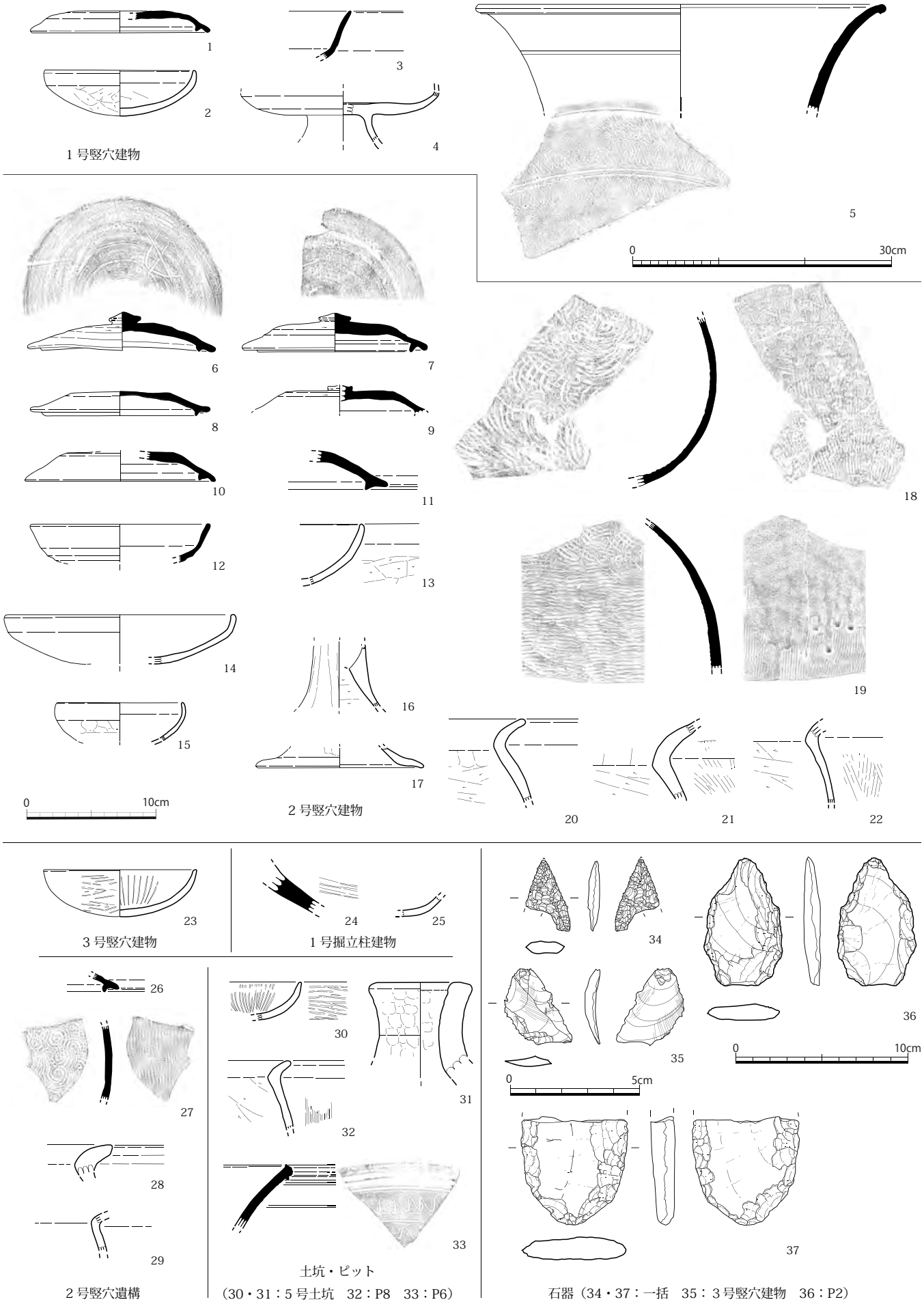
この土坑は、１号掘立柱建物の内側で確認され、南東側の一部を予備調査時のトレンチによって、掘り過ぎてしまっている。平面形は不定形を呈し、床面にはピットが数個見られる。また、床面は、西から東へ向かって、緩やかに傾斜する。埋土は暗黄色の粘質土であった。規模は南北軸約 1.1 m＋ α、東西軸約 1.2 m、検出面からの深さは約 20 ㎝を測る。

遺物は土師器片が出土したが、図化可能なものはなかった。

５号土坑（第 10 図　図版８）

この土坑は、２号土坑の西側で確認された。平面形は隅丸長方形を呈し、床面にはピット状の掘り込みがあり、それに向かって床面が傾斜していることから、この土坑に伴う可能性がある。規模は長軸約 1.0 m、短軸約 0.6 m、検出面からの深さは、ピット状掘り込みの底まで約 40 ㎝を測る。

遺物は弥生土器器台、土師器椀などが出土している。



第 11 図　出土遺物実測図（1/4、18・19・27・33：1/6、34・35：1/2、36・37：1/3）

６号土坑（第 10 図　図版８）

この土坑は、５号竪穴遺構の北西側で確認された。平面形はやや歪な円形を呈し、床面にはピット状の掘り込みが 1 個見られる。床面はほぼ平坦である。規模は長軸約 0.8 m、短軸約 0.6 m、床面までの深さは約 25 ㎝である。

遺物は出土しなかった。

７号土坑（第 10 図　図版７・８）

この土坑は、1 号竪穴建物と 5 号竪穴遺構の間で確認され、この 2 つの遺構に切られる。平面形は長方形を呈するとみられ、床面はほぼ平坦である。規模は長軸約 3.5 m＋ α、短軸約 0.6 m、床面までの深さは約 25 ㎝である。

遺物は出土しなかった。

５．出土遺物（第 11 図　図版 6・7）

今回の調査では各遺構から遺物が出土したが、その大部分は 2 号竪穴建物からのものである（6 ～ 22）。須恵器が中心で、宝珠形のツマミを有し、かえりが逆転している蓋が数点あり、時期比定の根拠となり得る。また、ヘラ記号が刻まれたものも 2 点みられた（6・7）。この他、弥生土器などが出土している。なお、土器についての詳細は、第 1 表の遺物観察表を参照されたい。

石器については、ここで記述する。34 は黒曜石製の打製石鏃である。遺構検出中に出土した。残存長 2.75 ㎝、幅 1.7 ㎝、厚さ 0.45 ㎝、重さ 1.33g を測る。35 は黒曜石製の剝片である。3 号竪穴建物から出土した。長さ 2.95 ㎝、幅 2.65 ㎝、厚さ 0.55 ㎝、重さ 1.92g を測る。36 は安山岩製のスクレイパーである。Ｐ 2 より出土した。残存長 7.4 ㎝、幅 4.55 ㎝、厚さ 0.95 ㎝、重さ 36.69g を測る。37 は安山岩製の打製石斧である。遺構検出中に出土した。残存長 6.3 ㎝、幅 6.2 ㎝、厚さ 1.4 ㎝、重さ 76.12g を測る。

Ⅳ　総括

前章までに、今回の調査で確認された遺構について記述してきた。最後にこれらの遺構の時期や性格などについて整理する。

まず、出土遺物からある程度時期が押さえられる遺構は、1・2 号竪穴建物である。2 軒とも須恵器蓋が出土しているが、宝珠形のつまみが付き、かえりが身から蓋へ逆転した時期のもので、7 世紀後半のものと考えられる。切り合い関係から 1 号→ 2 号の順となる。また、3 号竪穴建物からも小破片ではあるが、同時期の須恵器蓋が出土している。

次に 1 号掘立柱建物については、柱穴の埋土中より遺物が数点出土しているものの、時期を明確に決定できるものではない。そのため、この建物の時期を決める材料として、隣接し、軸方向がほぼ同じうえに、切り合い関係のない 1 ・ 2 号竪穴建物と同時期のものとして考えたい。さらに 2 号掘立柱建物も同様の軸方向から、これらの建物は併存しており、いずれも同時期と思われる。高瀬地区では、奈良時代以降に条里制が敷かれたと指摘されているが、今回確認された建物と条里地割と軸方向が一致していないことから、少なくとも 8 世紀代のものとは合致しないことの傍証と言える（田中裕介教授の御教示による）。また、3 号土坑についても、軸方向がほぼ同じ点や埋土に黒色土と黄色土を含む点など、建物に伴う遺構の可能性もある。

その他、石鏃や弥生土器などの遺物が出土しており、その時期と判断できる明確な遺構はないものの、断続的にではあるが、調査地付近における人の生活の痕跡を窺うことができる。

最後にこれらの建物の性格について、考えてみたい。

まず、1号掘立柱建物については、建物規模、柱穴の形状・規模や、全ての柱穴に礎板石を据える構造的な面から、官衙的な性格を有するものとして間違いないと思われる。また、大分市古国府遺跡15次調査の報告の中でも指摘されているが、同時期の大型の掘立柱建物と竪穴建物が併存する状況や、前後の時期に同様の建物が見られないことなどから、短期的な施設であったと想定できる（長2013）。前述したように高瀬地区に条里制が敷かれるまでの一時的な施設であったと捉えることができよう。

さらに踏み込んで、この建物の性格に言及するとすれば、三隈川を眼下に望む立地から、陸上と河川交通の結節点としての役割を担う施設であった可能性が高いと考えている。

最後に今回の調査における本遺跡の評価するならば、高瀬地区だけでなく、市内における古墳時代から古代の過渡期を考える上で、重要な資料を提供したと言える。

参考文献

田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査』1　大分県教育委員会　1995

高畠豊編『海部の遺跡』1　大分市埋蔵文化財調査報告書　第56集　大分市教育委員会　2005

長直信ほか編『古国府遺跡群』1　第15次調査　大分市埋蔵文化財発掘調査報告書　第122集　大分市教育委員会　2013

第1表　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第11図1	1竪建	須恵器	蓋	(11.8)			1.7	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	E	良	灰褐色	灰褐色	
第11図2	1竪建	土師器	坏	11.8			3.6	ケズリ後ナデ・ナデ	ナデ	ABEG	良	橙色	橙色	内面に工具痕あり
第11図3	1竪建	土師器	高坏				(3.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	DE	良	浅黄橙色	橙色	
第11図4	1竪建	土師器	高坏				(3.9)	摩耗のため、不明瞭	摩耗のため、不明瞭	DE	良	浅黄橙色	浅黄橙色	外面に黒斑あり
第11図5	1竪建	須恵器	甕	(46.8)			(12.4)	回転ナデ	回転ナデ	E		灰色	灰色	外面に櫛描波状文、黒斑あり
第11図6	2竪建	須恵器	蓋	12.2			3.1	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	EF	良	灰白色	黄灰色	外面にヘラ記号
第11図7	2竪建	須恵器	蓋	(11.8)			3.0	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	EF	良	灰色	灰色	外面にヘラ記号
第11図8	2竪建	須恵器	蓋	(11.8)			1.9	回転ナデ・ナデ・タタキ	回転ナデ	BEF	良	灰色	灰色	外面中央付近タタキあり
第11図9	2竪建	須恵器	蓋				(2.1)	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	EF	良	灰色	灰色	
第11図10	2竪建	須恵器	蓋	(12.4)			(2.3)	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	EF	良	灰色	灰色	第9図9と同一個体の可能性あり
第11図11	2竪建	須恵器	蓋				(3.0)	回転ナデ	回転ナデ	DE	やや不良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第11図12	2竪建	須恵器	高坏	(14.0)			(2.9)	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰色	灰色	
第11図13	2竪建	土師器	坏				(4.7)	ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ヨコナデ	CEG	良	橙色	橙色	1号竪穴建物出土と接合あり
第11図14	2竪建	土師器	皿	(17.4)			(3.8)	ヨコナデ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ナデ	DEG	良	浅黄橙色	橙色	
第11図15	2竪建	土師器	坏	(9.6)			(9.3)	ヨコナデ・ナデ 指オサエ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	EG	良	黒色	黒色	内外面ともにススト付着
第11図16	2竪建	土師器	高坏				(5.0)	ミガキ	ケズリ	EG	良	橙色	橙色	
第11図17	2竪建	土師器	高坏			13.0	(1.5)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ケズリ	CDE	良	橙色	橙色	
第11図18	2竪建	須恵器	甕				(19.6)	タタキ	当て具痕	B	不良	にぶい橙色	にぶい黄橙色	外面に自然釉
第11図19	2竪建	須恵器	甕				(17.1)	タタキ後カキメ	当て具痕	E		黒褐色	灰色	
第11図20	2竪建	土師器	甕				(6.5)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ 指オサエ後ナデ	ACDE	良	浅黄橙色	灰黄褐色	口縁部内面にススト付着
第11図21	2竪建	土師器	甕				(6.0)	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ケズリ	ABCE	良	にぶい橙色	にぶい黄橙色	口縁部内面に工具痕あり
第11図22	2竪建	土師器	甕				(6.3)	ナデ・ハケ	ヨコナデ・ケズリ	ACE	良	灰褐色	黒褐色	内面にススト付着
第11図23	3竪建	土師器	坏	(11.8)			3.6	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ	DE	良	明赤褐色	橙色	内面暗文・口縁部外面にススト付着
第11図24	1掘	須恵器	甕				(3.8)	回転ナデ・カキ目	回転ナデ	EF	良	灰色	灰色	
第11図25	1掘	土師器	坏				(1.6)	ナデ	ヨコナデ・ナデ	BDEG	良	橙色	橙色	
第11図26	2竪	須恵器	蓋				(1.4)	回転ナデ	回転ナデ	EF	良	灰色	灰色	
第11図27	2竪	須恵器	甕				(8.7)	タタキ後カキメ	タタキ	E	良	明赤褐色	明赤褐色	
第11図28	2竪	土師器	甕				(2.3)	ヨコナデ	摩耗のため、不明瞭	ABCDE	良	浅黄橙色	浅黄橙色	
第11図29	2竪	土師器	甕				(2.9)	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ACE	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第11図30	5土	土師器	皿				(2.9)	ヨコナデ	ヨコナデ・ミガキ	DE	良	淡橙色	淡橙色	外面に赤彩、内面に暗文
第11図31	5土	弥生	器台	(8.0)			(7.4)	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	ACDE	良	にぶい黄橙色	にぶい橙色	
第11図32	P8	土師器	甕				(5.4)	ヨコナデ・ハケ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ	ACE	良	にぶい橙色	灰褐色	
第11図33	P6	須恵器	甕				(7.5)	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰色	灰色	外面に櫛描文

法量の単位はcm。()書きは、残存と復元を表す。
胎土:A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒　Iその他

写真図版 1

調査区周辺空中写真（北西から）（白丸が調査地）

調査区垂直写真（上が北北西）

調査区全景（西から）

写真図版 3

① 1 号竪穴建物発掘状況（南東から）

② 1 号竪穴建物遺物出土状況

③ 2 号竪穴建物発掘状況（南西から）

④ 2 号竪穴建物焼土・炭検出状況

⑤ 2 号竪穴建物遺物出土状況

⑥ 2 号竪穴建物遺物出土状況

① 3 号竪穴建物・１号竪穴遺構
発掘状況（東から）

② 1 号掘立柱建物発掘状況（西から）

③ 1 号掘立柱建物発掘状況（東から）

④ 2 号掘立柱建物発掘状況（東から）

⑤ 2 号掘立柱建物発掘状況（南東から）

写真図版 5

① 1 号掘立柱建物 P1 発掘状況

② 1 号掘立柱建物 P1 完掘状況

③ 1 号掘立柱建物 P2 発掘状況

④ 1 号掘立柱建物 P2 完掘状況

⑤ 1 号掘立柱建物 P3 発掘状況

⑥ 1 号掘立柱建物 P3 完掘状況

⑦ 1 号掘立柱建物 P4 発掘状況

⑧ 1 号掘立柱建物 P4 完掘状況

① 1 号掘立柱建物 P6 発掘状況

② 1 号掘立柱建物 P6 完掘状況

③ 1 号掘立柱建物 P7 発掘状況

④ 1 号掘立柱建物 P7 完掘状況

⑤ 1 号掘立柱建物 P8 発掘状況

⑥ 1 号掘立柱建物 P8 完掘状況

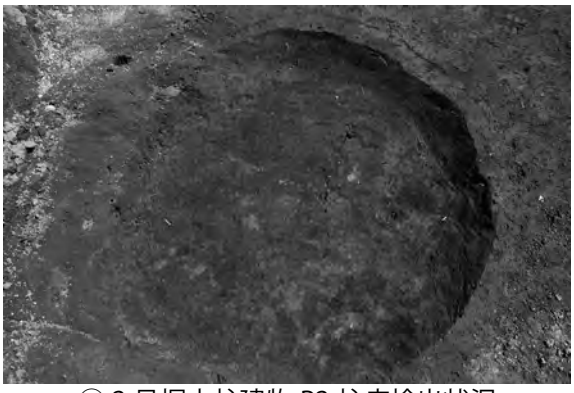
⑦ 1 号掘立柱建物 P9 発掘状況

⑧ 1 号掘立柱建物 P9 完掘状況

① 1 号掘立柱建物 P10 発掘状況

② 1 号掘立柱建物 P10 完掘状況

③ 1 号掘立柱建物 P5 発掘状況



④ 2 号掘立柱建物 P2 柱痕検出状況

⑤ 2 号竪穴遺構発掘状況（南西から）

⑥ 3 号竪穴遺構発掘状況（南西から）

⑦ 4・5 号竪穴遺構、7 号土坑（奥から）

⑧ 5 号竪穴遺構発掘状況（北から）

発掘状況（東から）

① 1 号土坑発掘状況（北西から）

② 2 号土坑発掘状況（北から）

③ 3 号土坑発掘状況（南東から）

④ 4 号土坑発掘状況（南東から）

⑤ 5 号土坑発掘状況（北東から）

⑥ 6 号土坑発掘状況（南西から）

⑦ 7 号土坑発掘状況（南東から）

11-1

11-2

11-4

11-5

11-6

11-7

11-8

11-10

11-11

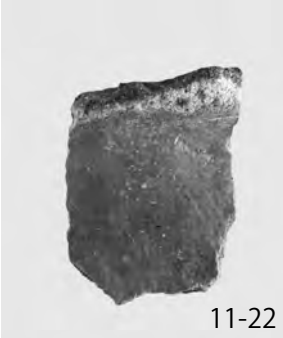
11-14

11-15

11-17

11-18

11-19


11-22

11-23

11-20

11-30

11-31

11-32

11-34

11-35

11-36

11-37

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ぜにぶちいせき
書　　名	銭渕遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 122 集
編 著 者 名	若杉　竜太
編 集 機 関	日田市教育庁文化財保護課
所　在　地	〒 877-0077　日田市南友田町 516-1
発 行 機 関	日田市教育委員会
所　在　地	〒 877-8601　日田市田島 2-6-1
発 行 年 月 日	2016 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
銭渕遺跡	大分県日田市 大字高瀬	44204-6	204128	33°　18′　31″	130°　56′　1″	20140226 ～ 20140430	260 ㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
銭渕遺跡	集落	古墳時代	竪穴建物 3、掘立柱建物 2 竪穴遺構 5、土坑 7、ピット多数	土師器、須恵器 弥生土器、石器	古墳時代終末期の官衙的性格を有する建物

要　約

遺跡は日田盆地南部の三隈川左岸の河岸段丘上に広がる遺跡で、今回の調査地は、三隈川を東から北にかけて望む段丘面の先端に位置している。調査においては、竪穴建物や掘立柱建物が確認された。特に掘立柱建物は建物規模、柱穴の形状・大きさ・構造などから官衙的な性格を持つ施設と考えられる。本遺跡一帯においては、８世紀に成立したと考えられる条里跡の存在が想定されているが、建物の軸方向が推定地割と合わないこと、隣接する竪穴建物から出土した遺物の時期などから、条里制成立以前の時期、７世紀後半の建物と考えられる。なお、建物の性格については、川を望む立地から河川や陸上交通に関係する施設と想定される。

銭渕遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第 122 集

2016 年 3 月 31 日

編集　日田市教育庁　文化財保護課

〒877-0077　大分県日田市南友田町 516-1

発行　日田市教育委員会

〒877-8601　大分県日田市田島 2-6-1

印刷　尾花印刷有限会社

〒877-0026　大分県日田市田島本町 8-8

日田市